

ハルビン工程大学主催の第8回国際大学雪像制作競争大会に参加して
京都大学チーム一同

キャプテン：山内一輝君 (M2)

ロストバゲージから旅が始まり、雪像作りでは遅れすぎだと急かされる中、メンバーの一人が体調を崩してダウンするなど問題ばかりでした。しかし、現地の学生との交流によって今回の滞在が非常に有意義なものとなりました。学生ボランティアの方々やシンポジウムの参加者と英語や日本語、筆談を駆使して様々な事を話し、行動をとることで文化の違いを感じることができました。また、我々の雪像作りが遅れていたため、ボランティアの方の友人が手伝いに来てくれました。彼らはテスト期間にもかかわらず、よく知らない我々の手伝いを本当に真剣に取り組んでくれ、そのような多くの人の援助のおかげで自信作と言える雪像を作り終えることができました。今回の滞在を通して、これまで自分が知っている一面だけで偏見を持っていた事を恥ずかしく思うとともに、もっと多くの国の人と深い関わりを持ちたいという考えが生まれました。

メンバー1：井上福太郎君 (M2)

私にとってハルビン工程大学における国際大学生雪像コンクールとシンポジウムへの参加は今回で2度目となりました。何故なら私は2年前にもこのコンクールに参加したからです。チーム内で雪像作りの経験を持っている人間は私だけだったので、その経験を活かして優れた雪像を作りチームを勝利に導きたいと意気込んでいたのですが、気合が空回りしてしまったのか、コンクール2日目にして私は風邪をひき、1日半の間寝込んでしまいました。体調が回復して雪像の様子を見に行くと、雪像はほぼ完成していました。

最後に、このような貴重な機会を与えていただきありがとうございました。

メンバー2：小西健人君 (M1)

現地の大学生ボランティアの方々はとても親切で、今まで見てきた中国人よりも礼儀やマナーが良く、驚いた。タクシー代や数回の食事代をボランティアの方々が払ってくれたのだが、こちらが多めに払おうとしても受け取ってもらえず、タクシー代に関しては全額持ってくれた。中国の大学はすべて全寮制で、日本の大学生よりも何倍も勉強熱心だと感じた。中国語と日本語は漢字が共通しているため、筆記や英語を駆使しての意思疎通が可能であったが、逆に「大阪」が”Osaka”で通じないことなどは盲点だった。以前食べた上海料理よりも、今回の東北料理は油っぽさが少なく私の好みに合っていた。お茶に対する考えが日本とは異なり、日常的には飲まないというのが意外だった。

メンバー3：大内健太郎君 (B4)

1月3日から8日の期間、ハルビンに行って参りました。英語、中国語、日本語など様々な言語で会話する6日間でした。ハルビン滞在中、雪像コンクールやシンポジウムを通して多くの方々と関わりました。外国の方とコミュニケーションをとるのは初めてでしたので非常に貴重な機会だったと思います。また、学部4回生の僕にとって、原子核工学に関するシンポジウムで英語を使って研究発表するというのは良い経験になりました。海外、英語でのやりとり、研究発表、これらすべてが新鮮なものでした。日

本だけにとどまることなく、世界にも目を向けてみようという気持ちが芽生えたように思います。このような機会をくださり、深く感謝しております。



制作した雪像「福神」（大阪は通天閣のビリケンさん）の前でチーム京大一同の集合写真
（左から Liu Yu さん(現地ボランティア)、井上福太郎君、大内健太郎君、山内一輝君、小西健人君、Sun Chen くん
(現地ボランティア))



ハルビン工程大学構内の制作された雪像群の展示風景(市民が見物に来ている)